

雲の手通信

2004年10月

第6号

発行人;茶木 登茂一

このお便りは私が担当している太極拳教室のみなさんに毎月お届けいたします。

今月のトピックス

おすすめ「人体の不思議展」

昨年から今年の初めにかけて開かれていた「人体の不思議」展がふたたび東京に戻ってきて、有楽町の東京国際フォーラムで来年の1月16日まで開催されています。前回のときも皆さんにおすすめしましたが、実に面白いですよ。特殊処理された本物の人体がそのままに、或いは各パーツごとにコレでもかというぐらい陳列されているので、たしかに気持は悪いのですが、興味はソレをはるかに越えます。「からだ=未知なる小宇宙」というサブタイトルの通り、人体の精巧さ、玄妙さ、その機能の高さ、複雑さなどなどに圧倒されます。手足の指先に毛玉のように密集している毛細血管、横隔膜のしなやかな厚さ、胃壁の心細い薄さ、深奥部にある大腰筋の様子などなど、時には直接さわること出来て、十分に理解できます。脳の重さもじかに掌に載せて測ることもできます。人体というものを作った造形主への大いなる畏敬の念と、大事に丁寧に使わなければいけないという想いが自然に湧き上がってきます。おすすめです。ぜひ一度お出かけください。

★10月17日(日)光が丘公園で「野外太極拳の集い」

10月17日(日)に練馬区の光が丘公園(都営大江戸線光が丘下車)で第6回の「野外太極拳の集い」が日本健康太極拳協会東京都支部北地域の主催で開催されます。教室の皆さんで誘いあってぜひご参加ください。時間は10時から13時まで、自由参加方式で参加費は無料です。

けんこうもうごろく 健康妄語録

薬と縁の無い私

あまり薬が好きでないせいもありますが、お蔭様で現在常用している薬はまったくありません。こんな私から見るとまわりに薬好き、或いは薬漬けの方がとても多いのでびっくりします。また街中に薬屋さんの多いこと、繁盛していることも驚きです。「薬を飲めば病気がよくなる」と思い込んでいるから飲むのでしょうか、自然治癒力で有名な安保徹先生のように現在の薬漬け医療に強い懸念を持っている先生方も少なくないのです。

安保先生のご本の中で紹介されている『医師の心得帳』(米国の医師の必読書である「ドクターズルール425」の邦訳版・南江堂)は医学に関する古今の名言、警句がコメント無しで425本列記されているだけの、もっぱらお医者さん向けの本ですが、大変にショッキングでかつ面白い本です。その中からいくつかご紹介しますと――

No.18 可能ならすべての薬を中止せよ。それが不可能ならば出来るだけ多くの薬を中止せよ。

No.173 4種類以上の薬を飲んでいる患者は医学知識の及ばぬ危険な領域にいる。

No.204 高齢者のほとんどは薬を中止すると体調がよくなる。

また、こういうものもあります。

No.46 あなたが診ようが診まいが、ほとんどの外来患者の病気は治るものである。

今までも教室でいろいろご紹介してきました安保徹先生や帯津良一先生の唱えている「自然治癒力」については、太極拳を続ければ続けるほどそのお考えがよく理解出来るようになりましたが、

きつと頭よりも体が分かってきたのだと思います。

薬好き、或いは薬漬けにならないためにも、これからもせっせと太極拳に励むつもりです。帯津先生ご自身の健康法『朝の気功、昼の情熱、夜の酒』を真似て——。

用語解説 び かいがんしょう 眉開眼笑

「慈眉善目」という言葉もあり、いずれも穏やかで優しく澄んだ眼差し（の人）を意味するそうです。これは私の太極拳の師でもある中野完二先生（日本健康太極拳協会副理事長・東京都支部長）が教室で説明してくれたものです。「健康・友好・平和」をモットーとする楊名時健康太極拳はまさにこのような“善い顔になるために”するのですというご説明がありました。太極拳は健康に良いからやっているというのがおおかたの認識かと思いますが、究極はまさに“善い顔になるために”ということなのですね。心・息・動の一致を心がけて長い間お仲間といっしょに練習を積み重ねてゆくと自然自然に善い顔に変わってゆくのでしょうか。楊名時先生がご本にもよく書かれている『健康即幸福・幸福即健康』というお言葉に相通じるものであると思います。

中野先生のお話には続きがありました。それは花森安治さんが『服飾読本』に書かれた「あらゆるものが発達した現代でも目の冴え、光りは装うことは出来ない」という言葉を、中野先生があるとき歌人の篠弘先生に話されたところ、篠先生が『これは面白い。いただきます。』と言ってさっそく短歌に作られたというお話でした。それは——

またぎ
眼差しの冴えは装うすべなしと花森安治つきつめて言う

という歌だそうです。ところでまったくの蛇足で恐縮ですが、篠弘先生はたまたま「ジパングクラブ」会員誌の短歌欄の選者もされておられて、私の旅の歌も2度ほど採っていただいています。

旅をうたい拳を詠む

昨年の夏は、スイスの南部ベルザスカ地方から、東部のベルニナアルプス、そしてチロルの山を訪れましたが、そのときの歌のいくつかをご紹介します。

（イタリーに近いルガーノ湖で）

朝焼けの紅に染まりし白鳥の泳ぐに和してゆるゆると舞う

（絶景のベルニナ鉄道を乗り継いで山中の小さな村や町に泊まる）

鳴り初めし鐘にゆだねて拳を舞うアルプの村の教会の庭

氷河へとヤナギラン咲く谷の道パカポコパカと馬車に揺られて

（湖畔の優雅なリゾート、サンモリッツにて）

鐘の音を乗せてみずうみ渡り来て風は山へと秋告げにゆく

遊印遊語

「用語解説」でご紹介した『眉開眼笑』をさっそく彫ってみました。商（殷）の時代（BC2000~1100）、青銅器の銘文などに用いられていた「金文」という字体を使ってみました。獣の骨などに彫られた「甲骨文（字）」に次いで古い字体です。象形文字の原型を留めていて微笑ましい稚拙さが魅力です。現代でも書や篆刻によく用いられています。

